



写真を撮るときは
常に自分の気持ちを表すつもりで
詩を連想しながら撮ることで



HITO

ひろし
松原廣司さん
(日本山岳写真協会会員)

山岳写真にドラマが見える！

下奥富に、アマチュアながら市内の写真愛好家では知らぬ者がなく、いろいろなカメラマンがいらつやいます。松原廣司さん。山歩き・写真歴40年以上のベテランです。狭山市や入間市の写真サークルに入って撮影会などに参加したり、公民館で講師を務めるほか、ご自分では年4回程度、1週間〜10日間の山「もり」をします。その写真歴を拝見すると、山だけでなく、風景やポートレート、航空写真などあらゆる写真を撮っていらつやいます。その中で、今も松原さんを魅きつけて止まない山。なぜ山岳写真を撮り続けるのですか、との質問に「山歩きを始めて手のついでに大自然の、本当にありのままの自然な色、これに感動したことがきっかけです。あの雄大な

取材の終わりに、ご本人の写真撮影をさせていただこうとすると、「撮るのはいいけど、撮られるのは苦手なんだよね。」と、夕焼けに照れながら、ポーズをとってくださいました。



大雪の中、くずはき橋を渡る自転車の学生。身近な見慣れた風景が、映画のワンシーンのようにドラマチックに見えます。

自然の色を見たとき、「この色を残したい。」と痛切に思ったのです。ただ、当時は写真もモノクロームしかなく、自然の色を表現したいときは紙焼きしたものに絵の具を塗ったりしました。」と語ります。

松原さんが好んで撮るのは、あまりほかの人が撮らないようなアングルです。カメラターや絵はがきでよく見るような風景でなく、見る者が「こんなに身近な山の、こんな姿があるんだ！」と思うような、ドラマを感じる写真。その作品の中には、私たちがふだん目にすることが多い、入間川の河原から見た富士山やくずはき橋などの風景写真もありません。写真愛好家の皆さんにひと言、と伺うと「まずは自分のカメラによく慣れること。それから、納得がいくまでたくさん撮ることですね。写真に自分の気持ちを表すように。後で写真を見た他人がどんな風に思うかなんて気にせずに撮ることが大切です。」と、その極意の一部を教えてくださいました。

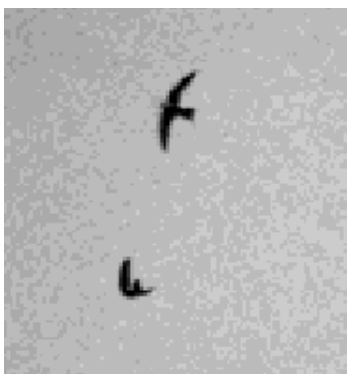
植物・生き物 / しょくぶつ・いきもの

さやまの生態系

アマツバメ

(アマツバメ目アマツバメ科)

全長約28cm。大部分が黒褐色で、腰と上尾筒、喉は白色、尾は鋭い燕尾です。日本やシベリア東部、中国などに夏鳥として渡来し、冬は東南アジア、オーストラリアなどで越冬します。日本には4月上旬から中旬頃に渡来し、高山や海岸などの崖壁に巣を作って繁殖します。そして9月上旬から11月中旬に、南へ帰ります。餌は主に飛ぶ昆虫などです。飛行中に翼が鎌のように曲がって見えることから、カマツバメとも呼ばれます。渡りのときには市街地の上空を群れで通過するのが見られます。市内では、入間川上空で観察されています。



撮影：県生態系保護協会狭山支部・矢内昭夫さん(水野)

Vol 55